

“古文”で書かれたポケモン図鑑

——『Pokémon LEGENDS アルセウス』ポケモン図鑑の日本語学的分析——

田中 草大

【目次】

1. 本稿の問題意識と目的 1
2. 文語文とは 2
3. 『アルセウス』ポケモン図鑑の文体 4
 - 3-1. 文語文的な要素 5
 - 3-2. 口語文的な要素 15
 - 3-3. 文語文的な要素の特殊な用法 19
4. まとめと展望 24

1. 本稿の問題意識と目的

ビデオゲーム『Pokémon LEGENDS アルセウス』（以下、『アルセウス』）内のポケモン図鑑は「古文」で書かれている——ということを、先日偶然に知った。そこでインターネットで検索をかけてみたところ、次のように、確かに現代語とは異なる「古文」で書かれていることが見て取れた（下線部が、現代語と異なる部分の例）。

例 01 頬に 電気を溜めし 袋を 有す。森林を 棲み処とし 硬き 木の実を 電撃で 焼き 食べる 知患者なり。（ピカチュウ・056）¹

例 02 絢爛なる 容貌を 持つ 偉丈夫。炎 纏いて 舞い踊るが如く 戦う様は 眼福以外の 言葉なし。（ゴウカザル・063）



図：ゲーム内の図鑑

図鑑におけるこうした「古文」の使用は部分的なものではなく、250 以上ある項目の全体にわたっている。

¹ 丸括弧内はポケモン名と図鑑番号である。以下同様。

ポケットモンスター（縮めて、ポケモン）は言うまでもなく世界有数の人気コンテンツであり、『アルセウス』も、日本での販売本数は 2022 年 4 月時点で既に 220 万本を超えているという²。現在の日本で最も多くの人に触れている「古文」は、この『アルセウス』ポケモン図鑑の文章と言えるかも知れない。

稿者は日本語の歴史を研究しているが、特にこの「古文」の歴史に関心を持っている。今年（2022 年）の 1 月に発売された『アルセウス』における様態を観察することは、「古文」の歴史のいわば最先端を見ることと言えるだろう。

また、『アルセウス』は当然ながら「古文」を熟知した層に向けて作られたゲームではあるまい。言い換えると、本作のポケモン図鑑の文章は「**古文**」を**よく知らない人でも読めるように書かれた「古文」**であると考えられる。そのような文章においてどのような「古文」の要素が採用されているかは、興味深いところである。

よって、本稿では『アルセウス』ポケモン図鑑においてどのような「古文」的要素が使われているか、それらの要素はどのように使われているか、またどのような「古文」的でない要素が使われているか、を分析・記述することを試みる。

なお、上記の例 01・02 を含め、本稿で掲げる用例（図鑑の説明文）は全て稿者がゲーム画面で実際に確認したものである³。プレイされた方はご存じのとおり、『アルセウス』ではポケモン図鑑に説明文を表示させるためにはポケモンごとに幾つかのタスクをこなす必要がある。当該ポケモンを 1 度捕まえれば説明文が表示された「赤・緑」期の知識しかない稿者には驚きであった。学問的動機という名目のもと、稿者がゲームにいそしんだことは言うまでもない。

2. 文語文とは

上記 1. では「古文」という言葉を使ったが、日本語学という学問分野ではこの言葉は普通使わない。代わりに「文語文」とか「文語体」といった用語を使う。以降、本稿では主に文語文と呼ぶこととする。

²『ファミ通.com』「ゲームソフト販売本数ランキング」<https://www.famitsu.com/ranking/game-sales/>（2022 年 4 月 12 日閲覧）。

³ 図鑑の説明文データを作成するにあたり、『ポケモン Wiki』（<https://wiki.xn--rckteqa2e.com>）が掲載するテキストを元データとして利用した。ただし、全てのデータについてゲーム画面との照合を行い、相違する部分はゲーム画面に合わせて修正した。

以下、本節ではこの文語文とはいかなるものかということについての概説を行う。理屈っぽい話が続くので興味がない方は次節 3.「『アルセウス』ポケモン図鑑の文体」にスキップしていただいて差し支えない。

文語文とは、一言で言えば「平安時代の話し言葉の文法が、書き言葉の文法として規範化し、後の時代まで使われ続けたもの」である。

我々が『源氏物語』や『枕草子』などで見ることができるあました文章は、今から千年前の話し言葉（つまり平安時代の京都弁）で書かれたものと推定されている（もちろん話し言葉そのものではなく、高度な文学的洗練を経たものであろうが）。話し言葉の方は時代が経つにつれて徐々に変化していく——室町時代後期の 16 世紀には、現代語にかなり近付いていた——が、対して書き言葉は一般に保守的な性格を持つので、過去の文法によって書く（書こうとする）ことが永らく続いた。下って明治時代の例として、福澤諭吉[1835-1901]の文章を次に挙げる。

例 03 知識見聞を開くためには、或は人の言を聞き、或は自から工夫を運らし、或は書物をも読ざる可からず。故に学問には文字を知ること必用なれども、古来世の人の思ふ如く唯文字を読むのみを以て学問とするは大なる心得違なり。
(『学問のすゝめ』2 編⁴)

いわゆる古典文法で書かれていることが分かるが、福澤が実際にこのように話したのだと考えてはならない。実際には彼は、現代の我々とほとんど同じような日本語を話したはずである。そのことは、福澤自身の別の著作からも確認できる。

例 04 或時、兄が私に問を掛けて「お前は是れから先き何になる積りか」と云ふから私が答へて「左様さ、先づ日本一の大金持になつて思ふさま金を使ふて見やうと思ひます」と云ふと兄が苦い顔して叱つたから、私が反問して「兄さんは如何なさる」と尋ねると、真面目に「死に至るまで孝悌忠信」と唯一言で、私は「へーイ」と云た切り其まゝになつた事があるが（後略）
(『福翁自伝』⁵)

⁴ 『福澤全集 巻 2』11 頁 (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/898728/401>)。表記を一部改めた。

⁵ 『福澤全集 巻 7』170 頁 (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/979057/170>)。表記を一部改めた。

つまり、例 03 の文章が我々が古文の授業で習ったような文法で書かれているのは、それが当時の話し言葉だったからではなく、あくまで書き言葉における習慣としてそうなののである。このような文章を文語文と言う。

文語文は、その時代の話し言葉に基づいて書かれた文章である口語文に対置される概念である。上の例 04 は、口語文の例である。

例 03 のように、文語文は明治時代に入ってから書かれ続けた。大日本帝国憲法（1889 年公布）も文語文である。文語文から口語文に移行しようとする運動のことを言文一致運動というのは周知のとおりであるが、これがほぼ完全に達成されるのは第二次大戦後である。日本国憲法（1946 年公布）が口語文で書かれたのは象徴的と言えよう。

現在でも、戦前から残る法律の文面や、伝統的な免状、そしておみくじ等に文語文は残っているが、新たな文語文が書かれることは日常的な言語使用の場ではほぼ無いと言える。

現在でも文語文が書かれるのは、文芸の場である。短歌・俳句がその代表格であろう。漢詩も、訓読による場合は文語文となる。またこれら伝統的文芸に加えて、小説・漫画・アニメ・ゲームといった場において、古めかしさを演出したい文章（例えば伝承や神託、掟）に文語文が使われることがある。『アルセウス』のポケモン図鑑における文語文も、もちろんこれに含まれる。

3. 『アルセウス』 ポケモン図鑑の文体

以下、『アルセウス』のポケモン図鑑の文章の特徴について分析していく。まずは、本図鑑の文章を文語文たらしめているのはどのような要素であるかについて記述する（3-1.）。次に、本図鑑に含まれている口語文的な要素について記述する（3-2.）。次いで、形としては文語文的な要素であるが、その使い方に従来の文語文の規範とは異なるところがあるものを指摘する（3-3.）。

主な調査対象は、図鑑番号 001 の「モクロー」から、図鑑番号 093 の「チュリネ」までの 100 項目⁶（全体の 1/3 強）における説明文である。これら 100 項目については網羅的な調査（文語文的要素の抽出）と分析を行った。それ以降の項目についても全体を見渡して適宜参照・引用しているが、補助的な調査であり網羅的なものではない。

⁶ 1 つの図鑑番号に複数の項目が割り当てられているものがあるため、図鑑番号と項目数にズレが生じている。例えば、「カラナクシ(にしのうみ)」と「カラナクシ(ひがしのうみ)」の図鑑番号はいずれも 082 である。

3-1. 文語文的な要素

今回、主な調査対象とした 100 項目から文語文的な特徴として抽出した要素は、述べ数で 451 件であった。その内訳を示したのが右の表である⁷(基本的に件数の多い順に並べているが、一部関係が深いものを並置している)。ニテ・ヨリのように、必ずしも文語文的とは言えない要素(口語文でも使われることがある要素)も含んでいるが、本図鑑においては文語文らしさの演出として使われていると判断し、要素として認めた。

表：『アルセウス』ポケモン図鑑
冒頭100項目における文語文的な要素

要素	件数		
格助詞不使用	134	逆接モ	9
文語動詞	68	準体法	7
ナリ	47	サレド	2
文語形容詞	38	ニ シテ	2
連体シ	36	已然形+バ(確定条件)	1
連体シ?	2	已然形+ド	1
ニテ	24	カナウ	1
ゴトシ	14	再帰代名詞コレ	1
タリ(用言に接続)	14	単純接続ニ	1
タリ(体言に接続)	1	ナラビニ	1
ヨリ	12	ニ オイテ	1
非音便	11	ベシ	1
ユエ	11	未然形+バ	1
ズ	9	ントス	1
		総計	451

以下、①格助詞の不使用・②形容詞の活用・③動詞の活用・④助動詞・⑤準体法・⑥接続法・⑦連用形終止・⑧体言止め・⑨文語文的な語彙、の順にそれぞれ説明していく。

①格助詞の不使用

本図鑑では主格のガや対格のヲが示されない表現が目立つ。次のようなものである(φは、そこに言語要素がないことを示す)。

例 05 耳を 丸める 理由は 所説^(ママ)φあり。聴力φ 高すぎるゆえ 耳に 入る 音量φ セーブし 聴覚φ 守ると 推察す。(ミミロル・064)

例 06 摩訶不思議な力φ 操りて 空模様や 人心φ 先読みす。日の光φ 浴びしとき 額の 緋の珠φ 輝きて 活力を増す。(エーフィー・029)

例 07 細き糸にて 体φ 包みつつ 進化の活力φ 蓄積す。手足φ 出せず 動きφ 鈍いが 双眸にて 睨みφ 利かし 抜け目φ なし。(カラサリス・019)

文語文においては、次の例 08 のように、単文では主格のガは示されないのが普通である。また例 09 のように、対格のヲが示されないことも珍しくない。

⁷ 「連体シ?」については 3-3.②を参照。

例 08 その竹の中に、もと光る竹 ϕ なむ一すぢありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中 ϕ 光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人 ϕ 、いとうつくしうてゐたり。（竹取物語）⁸

例 09 なほ、この女 ϕ 見では世にあるまじき心地のしければ、（略）「今日なむ、天竺に石の鉢 ϕ 取りにまかる」（同上）⁹

よって、『アルセウス』図鑑における先掲例 05～07 のような表現は、こうした文語文の特徴を反映させたものと言える。

先掲の表のとおり、今回の調査で本図鑑に見られる文語文的な要素（後述の 3-3.に属するものも含む）として得られた 451 件の内、134 件までがこの「格助詞の不使用」であり、事項としては最も多かった。

かつ、その中ではガの不使用に当たるものが 69 件と最も多かったが、ヲの不使用もそれに拮抗するほど多く、61 件が見られた。これは稿者にとってはやや意外な結果であった。と言うのも、単文の主格にガが使われないということは確かに文語文の大きな特色だが、それに比べるとヲは現代の書き言葉に比べると使われにくいというだけで、全く使われないというわけではない（つまり、特徴としてはガの不使用ほどは強くない）からである。現代の話し言葉でもヲはしばしば省略されるので、使いやすかったものであろうか。

なお、どのような場合に不使用が選択されるか／されないかということについての目立った基準は現時点で把握できていないが、次の 2 点の場合にはガの使用を避ける傾向があるようである。

1 点目。動詞アリの主語は名詞単体で示され、ガが付くことはない（図鑑全体で例なし¹⁰）。「むかし男 ϕ ありけり」（伊勢物語）のような語法が言語意識として定着していると考えられる。

例 10 双眼 金色に 煌めくとき 万物を 見通すとの 伝承 ϕ あり。（レントラー・017）

例 11 情け深く 病の 人やポケモン ϕ あらば 治るまで 看病す。（ハピナス・088）

⁸ 新編日本古典文学全集（小学館）・17 頁。

⁹ 同・25 頁。

¹⁰ 厳密には次の例があるが、これは口語形アルの例とも見うるものである。

・人の聴覚にて 感知できぬ 音が あるやも知れず。（リーシャン・195）

2 点目。形容詞の主語は名詞単体で示され、ガが付くことはない（図鑑全体で例なし）。動詞に比べて、「ガ+文語形容詞」という組み合わせは不自然であるという言語意識があったと考えられる。

例 12 炎 纏いて 舞い踊るが如く 戦う様は 眼福以外の 言葉φなし。（ゴウカザル・063）

例 13 海中より 陸地での 活動φ 多し。（トリトドン(ひがしのうみ)・083）

なお、この「助詞の不使用」という観点からして興味深いのは次のような例である。

例 14 古より ヒスイの地φ 暮らす者 この才に 頼ること 多し。（ウリムー・212）

例 15 尾の先端φ 凶悪なる 太い針を 有す。（グライガー・185）

例 16 エスパーパワーは 頭部の重量φ 比例し 強まること 測定にて 判明す。（フーディン・060）

上の 3 例は、それぞれφの位置で二を不使用としたもののようである。しかし語の継ぎ方として、これは口語文のみならず文語文としても自然ではないと思われる。「助詞を省略することが文語文らしさに繋がる」という言語意識があったことを感じさせる例と評価し得よう¹¹。

②形容詞の活用

次のように、形容詞においては全体にわたって文語形の活用が認められた（今回の主な調査範囲で 44 件中 38 件）。口語文法と異なる点として、終止形が～シ、連体形が～キとなる点があるが、どちらも現代語話者にも馴染みの深いものであり、利用しやすかったであろう。

例 17 野山に 群れを成し 住みつき 鳴き声 煩わし。小さきも 翼は 力強く 打たれしときは 一週間 痛み引かず。（ムックル・012）

例 18 長く 立派なる 浮袋を 有し 時化に 遭っても 溺れることなし。（フローゼル・

¹¹ 次の例も、φの位置で二を不使用とした例（つまり、「なれ」は助動詞ナリではなく四段動詞ナル）かも知れない。

・太き牙 流水を 砕くほど 頑丈なれど 折れることあり。されど 翌年φなれば 再生す。（トドゼルガ・145）

042)

例 19 絶対に 燃えることなき 摩訶不思議な 体毛なり。背を 此方へ 向けるは 攻撃の 合図なれば 注意されたし。(マグマラシ・005)

例 19 のように、形容詞型の活用をする助動詞タイにも、文語形タシが用いられている例がある。

已然形（仮定形）は次の 1 例のみ見られたが、これも次のように文語形となっている。

例 20 天日で 乾かし 煎じて 飲むと 苦けれども 疲労回復に 効果抜群。(チュリネ・093)

この他に形容詞で口語形と文語形が異なるものとしてはいわゆるカリ活用（補助活用）があるが、今回の主な調査範囲からは見いだされなかった。ただし図鑑全体を見ると、形容詞型の活用をする助動詞ベシに 1 例カリ活用の例があった（次例 21）。ベカラズという形は現代語話者にも馴染みがあるものと考えられる。

例 21 涙 流し 見る者の 同情心を 誘うも 体内水分を 排出し 健康維持する 生理現象なり。騙されるべからず。(ウソハチ・123)

これらに対し、形容詞が口語形の活用になっている例は少なく、今回の主な調査範囲では 44 件中 6 件のみであった。

③動詞の活用

動詞が文語形の活用をする例がある。ただし今回の調査で得られた 68 件のうち、スが 55 件、アリが 10 件で、この 2 つで 95%以上を占める。

《ス》

例 22 河川に ダムを こしらえ 巣とす。(ビーダル・011)

例 23 ヒスイの 極寒に 耐えるため 羽根の 芯に 空気を含み 防寒機能 有す。環境が進化に 影響すると 判明す。(ジュナイパー(ヒスイのすがた)・003)

例 24 敵対せし者の 意思を 操りて 傀儡に 変えとの 伝説あり。(アグノム・227)

例 25 色彩鮮やかにて 見目 大層 麗しいが 蜜 集めし ミツハニーを 追い払い 好物
を 独り占めせんとする 強欲さ。(アゲハント・020)

《アリ》

例 26 森にて 背の茸が 外れ 動かぬ 個体あり。(パラセクト・054)

例 27 情け深く 病の 人やポケモン あらば 治るまで 看病す。(ハピナス・088)

スとアリは、どちらも文語形が現在でもよく知られており、利用しやすかったと考えられる。

他方、二段活用はほぼ完全に処置せず、口語形の一段活用のままになっている(3-2.①参照)。二段活用させているものは、今回の主な調査範囲では次の3例のみであった。

例 28 吐息に混じりて バチリバチリと 電気の音 聞こゆ。(サンダース・027)

例 29 諍う者 あれば これを 巻きつけ たちまち 場を 和ます。(ニンフィア・033)

例 30 背の茸は 冬虫夏草なり。幼体には これ 無く 育つにつれ 生え出づる。(パラ
ス・053)

図鑑における動詞の活用の特徴として、「音便の不使用」も指摘できる。次のようなものである。

例 31 砂交じりの 旋風を 起こし 敵の威勢 挫きて 襲い掛かる。(カバルドン・108)

例 32 影に憑きて 命 狙いし ポケモン。(ゲンガー・138)

例 33 毒汁 放ちて 獲物と 対峙す。(スカタンク・111)

いずれも口語文法では「挫いて」「憑いて」「放って」のように音便を起こすところであるが、そうっていない。これも文語文らしさの演出と解される。

なお、音便は完全に排除されているわけではなく、先掲の例 18(「遭っても」)のようにこれを用いた例も見られる。

④助動詞

文語形の助動詞としては、ズ・ナリ・タリ・キ(連体形シのみ)・ゴトシがよく用いられていた。

《ズ》

例 34 小さきも 翼は 力強く 打たれしときは 一週間 痛み引かず。(ムックル・012)

例 35 朴訥なる 面構えと 万事に 動じぬ 大器。(ビッパ・010)

なお口語形のナイを使った例は、図鑑全体でも次の 2 例だけであった。口語感が顕わなため抑制されたのであろう。

例 36 存外 居心地は 悪くない模様。(ミノムッチ(ゴミのミノ)・043)

例 37 謎の 器具に 潜みし フォルム。器具の 用途は 分かっていない。(ロトム(スピンロトム)・194)

《ナリ》 ※ナラバは口語文法にも残るが参考までに掲げた。

例 38 巨漢 驚掴みにし 連れ去る 飛翔力は 脅威なり。(ムクホーク・014)

例 39 砂泥の皮膚は 相応に 硬く ムックルの嘴 程度ならば 易々と 弾き返すこと 造作なし。(ミノマダム(すなちのミノ)・044)

例 40 広大なる ヒスイの地を 1 日半で 横断せし 驚異の駿馬なり。(ギャロップ・024)

例 41 大きな 眼は 暗闇なれど 獲物の姿を しかと 捉えたり。(ブラッキー・030)

《タリ》

例 42 頭の 葉は 薬として 重宝されたり。(チュリネ・093)

例 43 群れから 離れ 単独で 生き抜く 力を 得たり。(ムクホーク・014)

例 44 小胆な 気性ゆえ 常より 身を 丸めるが 秘めたる 火力は 強烈。(ヒノアラシ・004)

例 45 海を越えて 飛来したならば 厳しき冬の 終わりを知る。(ラプトロス(けしんフォルム)・234)

なおタリに対応する口語形であるタも多く用いられるが(3-2.②参照)、いずれも文末以外での例である。文末の例は、図鑑全体で次の 1 例だけであった。文末のタは口語感が強いとされ避けられたものか。

例 46 古来は 尻行燈と 呼称され あやかしの類と 恐れられた。(ヒコザル・061)

《シ》

例 47 幼子 惑わし 彼岸へ 連れ去ると 伝えられし ポケモン。(フワンテ・037)

例 48 頬に 電気を溜めし 袋を 有す。(ピカチュウ・056)

例 49 寒冷地に 適応し 姿変えしと 推測。(ロコン(アローラのすがた)・168)

最後の例 49 は、連体修飾ではなく引用のトに接続する（つまり終止形が期待される）例である。

《ゴトシ》

例 50 炎のたてがみ 煌めかせ 駆ける様は 矢の如し。(ギャロップ・024)

例 51 岩盤の如き殻を 年に1度 脱皮す。(ゴローニャ・048)

例 52 炎 纏いて 舞い踊るが如く 戦う様は 眼福以外の 言葉なし。(ゴウカザル・063)

また、ナリ・タリ・シ・ゴトシの使い方には従来の文語文とは異なる部分も見受けられた(3-3.②で詳述)。

⑤準体法

次のように、準体法を用いた例が散見された。

例 53 背を 此方へ 向けるは 攻撃の 合図なれば 注意されたし。(マグマラシ・005)

例 54 メロディは 個体に よりけりゆえ 好みを 探すも 乙なり。(コロトック・040)

例 55 落石が如く 転がり落ちるを 好むゆえ 山道では 頭上に 気を配るべし。(ゴローン・047)

なお、上の例はいずれもコト準体句の例である。図鑑全体でも、モノ準体句と見られるのは次の2例だけであった(2例目は微妙な例である)。

例 56 この棲むは 天地の区別なき 世界と 考察す。(ギラティナ(オリジンフォルム)・237)

例 57 頭に頂く 冠羽の 立派なるは 強者の証しと 考察す。(ムクバード・013)

本図鑑で準体法がコト準体句に偏る理由は不明であるが、現代における他の文語文でも同様の傾向を示すのか、気になるところである。

⑥接続法

順接でユエ(二)を、逆接でモを使っているのが特徴的である。

《ユエ(二)》

例 58 常より 頭痛に 悩む。強まりしとき 秘めたる力 意に反し 暴発するゆえ 痛み和らげる術を 模索中なり。(コダック・068)

例 59 水を 口より 噴射する技は 同じだが 姿 あまりにも 違うゆえに 長き間 テッポウオの進化と 信じられず。(オクタン・147)

《モ》

例 60 人魂より 転生したと 噂あるも 真偽不明なり。(フワンテ・037)

例 61 頬の袋に 電気 蓄えるも 感情 昂りしとき 弾みで 放電す。幼体ゆえ 電気の扱いが 未熟なり。(ピチュー・055)

cf. 逆接ガの例

例 62 手足出せず 動き 鈍いが 双眸にて 睨み利かし 抜け目なし。(カラサリス・019)

ほかに、少数ながら「未然形+バ」(仮定条件)を用いた例が見られた(ナラバ以外では、図鑑全体で次の2例のみ。ナラバを含め、いずれもラ変+バの形をとっている)。

例 63 情け深く 病の 人やポケモン あらば 治るまで 看病す。(ハピナス・088)

例 64 海を越えて 飛来したらば 厳しき冬の 終わりを知る。(ラプトロス(けしんフォーム)・234)

なお 3-2.③で述べるとおり、仮定条件としては一般には口語形の「已然形(仮定形)+バ」を用いている。

また、図鑑全体で1例のみであるが単純接続の二の例も見られた。

例 65 鋭利なる牙 突き立て 生き物の血を 啜る。牙のつくり 検分するに 内に 空洞ありて ストロローの様なり。（ゴルバット・035）

「已然形+ド・ドモ」は、接続詞（サレド・シカレドモ）を除くとナレド（モ）にほぼ限られる（アレド（モ）も若干例あり）。基本的に「～であるが」の意味で、つまり確定条件で用いているが、次の例では仮定条件（「～であっても」）の意味で用いているようである¹²。

例 66 大きな 眼は 暗闇なれど 獲物の姿を しかと 捉えたり。（ブラッキー・030）

⑦連用形中止

連用形中止じたいは口語文にもよく用いられるものであるが、次のような例は口語文法からするとテを入れた方がより自然と思われ、文語らしさのために連用形中止が選択された可能性がある。

例 67 炎のたてがみ 煌めかせ 駆ける様は 矢の如し。（ギャロップ・024）

例 68 河川に ダムを こしらえ 巣とす。（ビーダル・011）

例 69 森林を 棲み処とし 硬き 木の実は 電撃で 焼き 食べる 知恵者なり。（ピカチュウ・056）

例 70 晴天に 比較し 曇天 ならびに 雨天において 活発なり。（トリトドン(ひがしのうみ)・083）

⑧体言止め

これも、これ自体が文語文的であるとは言えないが、文体の印象は文末で決まるところが大きいので、体言止めにする（＝文末に用言を置かない）ことによって口語らしさの表出を防止するということが行われた可能性が考えられる。

例 71 闇夜の かがり火に 誘われる 習性。（ドクケイル・022）

例 72 出し抜けに 村に現れ たちまち 米蔵を 空にする 大食漢。（カビゴン・052）

¹² ただし、この例文の内容を、（当該ポケモンの一般的知識を記したものではなく）書き手が体験した一回性の事態を記したものと見ると、この「なれど」も確定条件で解釈できる。3-3.②参照。

例 73 天敵より 身を 隠すに うってつけの様子。(ミノマダム(ゴミのミノ)・044)

例 74 この蔓 噛めば 清涼感あり 香辛料として 有用。(モンジャラ・095)

例 75 体毛は 暖かにして 実に 軽量。(ミミロップ・065)

⑨文語文的な語彙

文法に関わる語彙の中に、次のように文語的なものの活用が認められた。

《ヨリ》

例 76 水を 口より 噴射する技は 同じだが 姿 あまりにも 違うゆえに 長き間 テッポウオの進化と 信じられず。(オクタン・147)

cf. カラ

例 77 両眼は 退化し 光 失うも 口から 放つ 音波にて 周囲を 探りて 飛翔す。(ズバット・034)

《ニテ・ニシテ》

例 78 外見にて 判別すること 叶わず。(ケムツソ・018)

例 79 色彩鮮やかにて 見目 大層 美しいが 蜜 集めし ミツハニーを 追い払い 好物を 独り占めせんとする 強欲さ。(アゲハント・020)

例 80 体毛は 暖かにして 実に 軽量。(ミミロップ・065)

cf. デ

例 81 睡眠時も エスパーパワーを 操りて 危険 迫ると 瞬間移動で 回避す。(ケーシィ・058)

《再帰代名詞のコレ》

例 82 産みし卵 これ 絶品なりて 食し者に 幸を もたらす。(ハピナス・088)

《サレド》

例 83 力弱く 愚鈍で 情けなし。されど 生命力 強く 濁水を 物ともせぬゆえ あらゆる土地にて 生息を 確認す。(コイキング・080)

《アタワズ》

例 84 青き蔓で 全身を 覆いたりて 正体 見ること 能わず。(モンジャラ・095)

例 85 奇天烈な 道具により 進化せし姿。鋼鉄の粒を まぶせし 体は 硬く 金剛石でも 傷付けること 能わず。(ハガネール・119)

《ワガ》

例 86 放つ 電撃は 10万ボルトを 凌ぎ 我が故郷に 棲む ダイオウドウをも 一撃で 気絶する 威力なり。(ライチュウ・057)

例 87 遠き故郷を想う 我が姿を 重ね見る。(ピクシー・201)

* * * * *

以上をまとめると次のようになる。本図鑑における文語文的要素の主体を成すのは、①(格助詞の不使用)・⑤(準体法)のような**助詞の不使用**(口語文法を基準に言えば、助詞の省略)と、②(形容詞)・③(動詞)・④(助動詞)のような**文語形の用言の活用**、この2類である。

ただし後者(文語形の用言の活用)について注意されるのは、形容詞では文語形の活用が全般的に行われているのに対して、動詞・助動詞では全般的でなくむしろ個別的であるということである。すなわちス(サ変)・アリ(ラ変)および個別の文語助動詞の採用に留まり、二段活用はほぼ行われていない。

この点は、読み手よりもむしろ書き手に有利に働いていると言えるように思う。文語文法の知識を体系的に習得していなくても、個別的な知識(サ変・ラ変および個別の助動詞)によって書けるためである。

また上記2類のほか、⑥接続法・⑦連用形中止・⑧体言止め、および⑨個々の文語文的な語彙の使用といった形で、補助的に文語文らしさの形成がなされているらしいことも認められた。

3-2. 口語文的な要素

『アルセウス』のポケモン図鑑はもちろん徹頭徹尾文語文法で書かれているわけではなく、口語文的な要素も色々の面で含んでいる。網羅的に指摘すると煩雑になるため、特徴的なところとして①動詞の活用・②助動詞・③接続法・④推量表現を取り挙げて説明する。

①動詞の活用

3-1.③でも触れたように、文語形の二段活用はほぼ使われず、口語形の一段活用によって

いる。これは助動詞(サ)ス・(ラ)ルでも同様である（例 91・92）。

例 88 吐き出す 糸と 砂泥 練りあげ 蓑を こしらえる。砂泥の蓑は 風雨に脆く 洞などに 隠れる。（ミノムッチ(すなちのミノ)・043）

例 89 ひとときわ 大きな 群れを成し 争いは 絶えることなし。（ムクバード・013）

例 90 落石が如く 転がり落ちるを 好むゆえ 山道では 頭上に 気を配るべし。（ゴローン・047）

例 91 体熱を 急低下させる 能力を 有す。大気 凍らせ 宝石の如き 煌めく 細氷を 舞い躍らせる 現象 起こす。（グレイシア・032）

例 92 山岳地帯に棲み 両腕にて 険しき 山道 登る。不用意に 足蹴にすれば 怒り 追い立てられるゆえ 厄介なり。（イシツブテ・046）

サ変（→ス）・ラ変（→アリ）は、3-1.③で指摘したとおり文語形で活用するが、口語形で活用した例も見られる。ただし少数派であって、終止形となるところに着目すると、今回の主な調査範囲では、ス（スル）で文語形 45 例・口語形 4 例¹³、アリ（アル）で文語形 9 例・口語形 1 例となった（奇しくもどちらも 1 割程度となっている）。

次の 2 例では口語形（スル・アル）と文語形（ス・アリ）とが併存している。

例 93 灰暗き 洞穴を 寝床とする。両眼は 退化し 光 失うも 口から 放つ 音波にて 周囲を 探りて 飛翔す。（ズバット・034）

例 94 多様な姿に 進化する 可能性あり。ポケモンの 進化の秘密を 解く鍵 この身の内に あると 確信す。（イーブイ・025）

②助動詞

《名詞に直接するサセル・サレル》

サ変動詞に助動詞サス・ラルが接続する場合、セサス・セラル（口語形ではセサセル・セラレル）となるのが本来の形であるが、本図鑑では一様にサセル・サレルの形を取る（つまり、名詞に助動詞サセル・サレルが直に接続する）。

例 95 体熱を 急低下させる 能力を 有す。（グレイシア・032）

¹³ 次の例を含む。これは「長じる」ではないという点で 3-1.③では文語動詞の例に含めているが、ここでは「長ず」ではないという点で口語形に含めている。

・青面の 色深きほど 豪に 長ずる。（モウカザル・062）

例 96 ヒスイの地の 水に 含有する 鉄が 皮膚の粘液に 作用し 金属の殻へ 変容 させたと 考察す。(ヌメール(ヒスイのすがた)・116)

例 97 花の蜜が 主食と 観察されるも 花畑にて 見かけること 少なし。(ガーメル・045)

例 98 凶兆を運ぶと 忌避されし ポケモン。出会いし際は すらかみ屋は繁盛繁盛 と の まじない 唱えよと 教わる。(ヤミカラス・140)

《ナ》

断定の助動詞ナリの連体形ナル(=先掲例 40)だけでなく、口語形のナもしばしば用いられる。使い分けの有無については定かでないが、例えばオオキナ(オオキナル)は図鑑全体で 4 例あるが常に口語形で使われる(次例 99)。詳細に調査すれば使い分けが認められるかも知れない。

例 99 腕の 大きな 鎌は 切れ味 鋭く 真に 恐ろしき 得物なり。(ストライク・072)

例 100 面妖な形の枝角は 見る者 惑わす力を 秘める。(オドシシ・049)

《タ》

過去の助動詞タは文末で用いると口語的な色合いが濃いため使用は抑制されたと考えられるが(文末の使用例は 3-1.④で挙げた例 46 のみである)、文中での使用例は、引用節での末尾の例(例 102)を含め、次のように一定数存する。

例 101 抜け落ちた 角の 黒き珠を すり潰した 薬は 不眠に 効果あり。(オドシシ・049)

例 102 人魂より 転生したと 噂あるも 真偽不明なり。(フワンテ・037)

③接続法

接続法では 3-1.⑥で見たとおり文語文的な語法が活用されているが、口語文法のものとしては(3-1.⑥で例示した逆接ガの他に)恒常条件のスルトが見られる。

例 103 睡眠時も エスパーパワーを 操りて 危険 迫ると 瞬間移動で 回避す。(ケーシィ・058)

例 104 手頃な 材料が 見つからぬと ちり芥にて 蓑を こしらえる。(ミノムッチ(ゴ
ミのミノ)・043)

また、「已然形+バ」は次例のように、確定条件ではなく（口語文法と同様に）仮定条件（主に恒常条件）として用いられていると思しい¹⁴。これは近代以前の文語文でもまま見られる。

例 105 わずかでも 蓑が 痛めば 辺りの 手近な 材料にて 即 繕う。(ミノムッチ(く
さきのミノ)・043)

例 106 不用意に 足蹴にすれば 怒り 追い立てられるゆえ 厄介なり。(イシツブテ・
046)

④推量表現

文語文法にはベシ・ナリ・メリ・ラム・ケム・マシ・ラシなど、推量・推定のための助動詞が豊富に存するが、いずれも口語文法に残っておらず、使い勝手が悪い。実際、本図鑑でもこれらの語の使用例はない¹⁵。逆に、口語文法にあるダロウ・ソウダ・ヨウダ・ミタイダ・カモシレナイのような推量・推定表現は、文語文にそぐわず、これらも用いられていない¹⁶。他方、多用されているのが次のような表現である。

例 107 対になりて 縄張りを 哨戒す。体毛に 火成岩なる 成分 混ざるは 火山活動
の 影響と 推察す。(ガーディ(ヒスイのすがた)・150)

例 108 水の分子と 酷似せし細胞 検出す。潜水中 姿 隠すは これが理由と 推察。
(シャワーズ・026)

例 109 身の丈 超える 獲物を 倒す威力の 空気の波を 発す。小さき風音を 体内に
て 増幅すると 推測す。(チリーン・196)

例 110 寒冷地に 適応し 姿変えしと 推測。(ロコン(アローラのすがた)・168)

¹⁴ 今回調査が及んだ範囲では、「已然形+バ」が確定条件で用いられているのは次の例のみである。

・背を 此方へ 向けるは 攻撃の 合図なれば 注意されたし。(マグマラシ・005)

¹⁵ ベシは用いられているが、推量ではなく当為の意味で用いられている。

¹⁶ なお次のようなヤモシレズの例が2例ある。

・人の聴覚にて 感知できぬ 音が あるやも知れず。(リーシャン・195)

例 111 氷河期と 呼ばれし世に 全盛 極む。厳寒なる ヒスイの地 その体質に適し 眠りし力が 目覚めたと 考察す。(マンムー・214)

例 112 ヒスイの中心にそびえし 霊山の気が 影響した姿と 考察。(バクフーン(ヒスイのすがた)・006)

例 113 ヒスイの地に 伝わりし ひと節あり。強き光は 深き影 生み出したり。深き影こそ このポケモンと 想像す。(ギラティナ(アナザーフォルム)・237)

ややぎこちない表現であるが、上記のように使い勝手の良くない文語文法の推量・推定表現の代替として、こうした「～と推察／推測／考察／想像（す）」という より直接的な表現が用いられたものと推察する。

3-3. 文語文的な要素の特殊な用法

図鑑本文の中には、形としては文語文的な要素であるが、その用法が従来の文語文の規範とは異なっている例がある。本節ではこのような要素について記述する。

①動詞

動詞スについて、次のように、連体修飾の位置で終止形スが用いられる例が複数見られた。

例 114 小刀に比肩す 鋭利なる羽根 翼より 巧みに 飛ばす技 体得す。(モクロー・001)

例 115 温厚な 気質など 相違点 あれども バスラオの 特徴を 多く 有すゆえ そのリージョンフォームと 定義す。(バスラオ・166)

例 116 神通力 有す 童が 変容した姿と 噂あるも 真偽不明。(ユングラー・059)

例 117 カラテマスターの如き 蹴りを 放ち 相対す者を 造作なく 撃退す。(ミミロップ・065)

例 118 道化師 思い起こす 姿にて 指先より 発す 気力 用いて 透明な壁を作る。(バリヤード・077)

口語文法と同じくスルが文法的であるところにあえてスを用いるのは、文語文らしさを演出するために一種の過剰修正が起こったものと捉えられる¹⁷。

¹⁷ 次の例は、形容詞において終止形が連体修飾に用いられているものであるが、こちらはごく例外的である。

動詞の活用については次のような例も認められた。

例 119 奇天烈な 道具により 進化せし姿。 鋼鉄の粒を まぶせし 体は 硬く 金剛石でも 傷付けること 能わず。(ハガネール・119)

動詞マブスは四段活用、シ(←キ)は連用形接続であるから、マブシシが期待されるところであるが、シはサ変動詞では未然形セに接続する(=セシ)ため、その類推からマブセシという語形が生じたものと解釈される。

サ行四段動詞+助動詞シが～セシとなる現象は古くからあり、夙く本居宣長が指摘している¹⁸。現代に書かれた文語文でも同じ現象が起こっていることを面白く思った。

②助動詞

《シ》

助動詞キの連体形シには次例のように、過去というよりは完了の意味で用いた例がある。口語文法のタをシに置き換えたものと解される。

例 120 頬に 電気を溜めし 袋を 有す。(ピカチュウ・056)

例 121 美麗なれど 猛毒 たたえし棘 有す。(ロゼリア・090)

例 122 怒りしとき 体毛を 逆立てること 鋭き 針の如し。(サンダース・027)

また、過去の意味も完了の意味も読み取りがたい次のような例もある。

例 123 影に憑きて 命 狙いし ポケモン。己が影 ひとりでに 笑いしときは 一刻も早く 清めの札 握るべし。(ゲンガー・138)

例 124 針より 毒 散らす 厄介者ゆえ 漁師には 忌み嫌われし 存在。(ハリーセン(ヒスイのすがた)・084)

こうした例では、シは過去や完了の意味を意図したものではなく、単に「文語調の連体語尾」として使用されたものかとも解される。

・恨み抱え 雪山に 消えし 女人の魂 宿りし ポケモン。 行い悪し 男を 呪い殺すと 伝承あり 肝 冷えたり。(ユキメノコ・207)

¹⁸ 『玉あられ』文の部・「ませし」。

このことの傍証とも考えられる、次のような事象がある。シについては次のように、接続の不審な例が散見されるのである（3-1.冒頭の表の「連体シ？」はこの類の例を指す）。

例 125 気性 荒々しく 荒地にて 遭遇しときは 逃げの一手。（バサギリ・073）

例 126 卵に似た姿。野山にて 遭遇し折 卵が動いたと 早とちりする者 多し。（トゲピー・127）

例 127 流氷 接岸し季節は 天敵 少なきゆえ 陸地より 氷上生活を 好む。（タマザラシ・143）

例 128 食し者に 幸を もたらす。（ハピナス・088）

例 129 白髪 振り乱し姿 死神の如く。（ゾロアーク(ヒスイのすがた)・220）

例 130 嵐を 巻き起こし ポケモン。（トルネロス(けしんフォルム)・231）

例 125 から 128 は、名詞に助動詞シが直接接続しているように見える例である（規範的には「遭遇せし」「接岸せし」「食せし」が期待される）。サ変動詞の連用形シと、助動詞キの連体形シが混同されたものか¹⁹。他方、例 129 から 130 は、四段動詞の連用形が連体修飾しているように見える例である（規範的には「振り乱しし」ないし「振り乱す」が期待される）。これも同じく、助動詞キの連体形シと混同されたものと思しい。

こうした例からも、やはりシが（過去・完了という意味ではなく）単なる連体語尾と捉えられるケースがあったように思われる。

《ナリ》

3-1.④で見たように、断定ナリは図鑑内で活用されているが、その中で次のような規範的でないナリテという形の例が複数見られた。規範的にはニテないしニシテが期待される場所であるが、ラ変を規則的に活用させることで作られた語形と見られる。

例 131 心清らかなりて 傷つきし者に 卵を 分け与える。この卵 滋味豊かなりて 医者いらずとの異名を 持ちたり。（ラッキー・087）

例 132 産みし卵 これ 絶品なりて 食し者に 幸を もたらす。（ハピナス・088）

例 133 胃袋 頑丈なりて 腐りしものも 平気で 食らう。堆肥の 原料となる 生ごみ 狙いて 村に 出沒す。（ゴンベ・051）

¹⁹ 最後の例 128 は、「食し」を「食(くい)し」と読むと文法的には自然になるが、「食う」という語の選択、および送り仮名の付け方に不審が残る。例 125～127 のような例からすると、これも「食(しょく)し」で、キの連体形シを名詞に直に接続させたものと思われる。

cf. ニテ・ニシテ

例 134 色彩鮮やかにて 見目 大層 美しいが 蜜 集めし ミツハニーを 追い払い 好物を 独り占めせんとする 強欲さ。(アゲハント・020)

例 135 稀に 震える程度にて ほぼ動かず。(チェリム(ネガフォルム)・067)

例 136 毒を有し 気質は 卑劣なり。されど 鳴き方 珍妙にして 滑稽な 面構えゆえ 人気あり。(グレッグル・099)

例 137 凶暴にして 獐猛なる 気質。(ドラピオン・149)

《タリ》

タリの例の中に、用法が不審なものがある。周知のとおり、古典文法におけるタリには体言接続のもの(意味は断定)と用言の連用形接続のもの(意味は存続・完了)とがあるが、本図鑑では体言接続の例もあるが多くは用言接続で用いられている。

つまり接続からすると存続・完了の助動詞であり、事実その意味で問題なく解釈できる例もある(3-1.④のタリの挙例を参照)。その一方で、次のように、用言接続でありながら存続・完了の意味では解しがたく思われる例も存するのである。

例 138 袋状の内臓にて 炎を 燃やす。大気を吸い込み 火力 強めたり。(ブースター・028)

例 139 月光 降り注ぎし 夜半こそ 活発に 行動す。大きな 眼は 暗闇なれど 獲物の姿を しかと 捉えたり。(ブラッキー・030)

例 140 乙女の如き姿なれど 不可思議な能力 操り 楽園なる景色を 映し出したり。紅のかんざしに 秘密あると 推測す。(キルリア・102)

これらに対しては、次の2つの解釈がありうるように思う。

1つは、これらも完了(ないし過去)の意味で捉える解釈である。本図鑑は、ゲーム中の登場人物であるラベン博士が執筆したという設定になっている。一般に図鑑の説明文というのはその対象(この場合は個々のポケモン)についての一般的知識を説くものと考えられるが、本図鑑では書き手すなわちラベン博士が体験した一回性の事態と思しい記述も見られる²⁰。

²⁰ 3-2.④で挙げた「～と推察／想像／考察す」のような表現も、書き手による個別的な動作の記述と見なせるものである。

例 141 満月の夜 静かなる 山間にて 遭遇。小さき翼 ほのかに光り 舞う姿は まさに 妖精の如き 愛くるしさなり。(ピッピ・200)

例 142 静寂たる 月夜に 耳を澄まし 月に 棲む 仲間の声を 聴くと 伝承あり。遠き故郷を想う 我が姿を 重ね見る。(ピクシー・201)

例 143 行い悪し 男を 呪い殺すと 伝承あり 肝 冷えたり。(ユキメノコ・207)

これらに即して考えると、先掲の例 138～140 における「火力 強めたり」「獲物の姿をしかと 捉えたり」「楽園なる景色を 映し出したり」も、ポケモンについての一般的説明ではなく書き手が捉えた一回性の事態であり、タリは完了ないし過去の意味で使われているのではないか。

対するもう 1 つの解釈は、「本図鑑ではタリの語義が安定しておらず、用言接続のものにも断定の意味で用いたものがある」とするものである。例えば先掲の例 138 などは、やはり一回性の事態とは見にくいように思われる。また上述のように書き手の体験した一回性の事態を記した箇所があるとは言え、図鑑本文の基調を成すのは個々のポケモンについての一般的内容であると考えられる。

こうした点との整合性を考えると、用言接続のタリにも存続・完了の語義でない例があると考えるのがよく、その場合に最も妥当性のある語義は、同じ語形を持つ体言接続のタリのもの、すなわち断定ということになる。

あるいは、用例によって上記の 2 解釈のいずれかがそれぞれ当てはまるということも考えられる。検討を進めるにはより精密な用例分析を要するが、本稿ではその準備がないためこれ以上は論じない。

《ゴトシ》

主格にノをとるもの(=次例 144～146)とガ(=次例 147～149)をとるものがある。

例 144 炎のたてがみ 煌めかせ 駆ける様は 矢の如し。(ギャロップ・024)

例 145 岩盤の如き殻を 年に 1 度 脱皮す。(ゴローニャ・048)

例 146 束ねた蔓を 腕の如く 振るい 獲物に 巻きつき からめとる。(モジャンボ・096)

例 147 炎 纏いて 舞い踊るが如く 戦う様は 眼福以外の 言葉なし。(ゴウカザル・063)

例 148 落石が如く 転がり落ちるを 好むゆえ 山道では 頭上に 気を配るべし。(ゴローン・047)

例 149 甲冑が如き 硬き皮膚は 溶岩の熱を 物ともせず 火山地帯を 闊歩す。(サイドン・121)

いわゆる古典文法においては、主格が名詞の場合はノをとり、主格が用言の場合はガをとる(ただし代名詞ではガもとる)とされるが、本図鑑では名詞でもガをとる例が複数見られる(=例 148・149)。

また、理由は不明であるが、連用形ゴトクで終止する例が図鑑全体で 3 例見られた(次例 150 では「如く。」が本文の末尾である)。終止形ゴトシで終止する例は図鑑全体で 4 例なので、ほぼ拮抗している。

例 150 ひとたび 鳴けば 数多のヤミカラスが 飛来す。その様 夜の帳 頭上を覆い 世を 漆黒の闇に 転ずるが如く。(ドンカラス・141)

例 151 振る舞い パントマイムが如く。道化師 思い起こす 姿にて 指先より 発す 気力 用いて 透明な壁を作る。(バリヤード・077)

例 152 白髪 振り乱し姿 死神の如く。我が身をも 切り裂く 激しき怨讐にて 仇 襲い 道連れ覚悟で 仕留めたり。(ゾロアーク(ヒスイのすがた)・220)

* * * * *

以上、①(動詞)と②(助動詞)における、文語的要素が規範と異なって用いられている点について記述した。3-1.で、文語文的要素が全般的でなく個別的に採り入れられている部分として動詞と助動詞を挙げたが(3-1.末尾のまとめを参照)、本 3-3.で記述した内容からも、動詞と助動詞の運用が本図鑑を書く上での 1 つの難所であったことが伝わってくる。

4. まとめと展望

前節 3.で論じてきたことをまとめると次のようになる。

『アルセウス』ポケモン図鑑における文語文的要素の主体を成すのは、助詞の不使用と文語形の用言の使用である。ただし後者のうち、動詞・助動詞については、その使用は個別的である（＝3-1.）。その文語形の動詞・助動詞については、従来の文語文の規範とは異なる用法の例もあり、運用上の困難が認められた（＝3-3.）。加えて、これら動詞・助動詞ほか色々の点で口語文的要素も確認された（＝3-2.）。

上のまとめは、1.で述べた「『古文』をよく知らない人でも読めるように書かれた『古文』」の様態としておおよそ納得されるところではないかと思う。

最後に、羅列的となるが、期待される展望について述べる。

まず、3.の冒頭で確認したとおり今回の主な（網羅的な）調査範囲は冒頭からの 100 項目であるので、それ以降の項目についてもつぶさに観察することで、本稿では見逃した現象が確認される可能性はもちろんある。

今回あまり導入できなかった観点として、「本図鑑で採用されていない文語的／口語的要素はどのようなものか」というものがある（二段活用や文末のタやナイ等、本稿でも部分的な指摘は行ったが）。この観点を本格的に導入することで、本稿とは異なる様態が見えてくる可能性がある。また今回は文法的な面に絞って検討したが、語彙の観点（たとえば語種）からも分析は可能なはずである。これらの分析においては、シリーズ他作品の図鑑本文と比較するのが有効であろうか。

また他言語版では、本稿で指摘したような要素がどのように処理されているかも興味がわくところである。

（2022 年 7 月 28 日 公開）

公開 URL : <https://researchmap.jp/soTANAKA/>